

本研究では愛知県常滑市における窯業の推移と現状を考察した。常滑の窯業は明治時代から昭和初期にかけて大きく発展した。その後、第二次世界大戦により混乱したが、戦後は復興を果たし、1990年代後半まで成長を続けた。しかし、バブル崩壊後の不況により出荷額の減少がみられ、衰退し始めた。現在もこの傾向は続いている。戦後の常滑の窯業は出荷額の大きいタイル・衛生陶器の大企業と日用品・工芸品を生産する零細企業という二重構造の中で成長してきた。衰退のなかでもこの構造は続いている。この内、零細企業は「常滑焼」というブランド価値をもつ製品を生産し、常滑焼産地の中心を担っている生産者である。

常滑焼産地の生産者数は多いものの生産力が小さく、茶器・鉢といった伝統的な品目を生産している。従業者規模は小さく、労働力の中心は家族・親族である。その生産・流通構造では生産者が組合から原土を購入し、自ら製造工程を受け持ち、販売を産地問屋に委託するという、伝統的な形態が根強く残っている。

近年では、不況による所得の低下と個人消費の冷え込み、生活様式の変化、輸入品の増加により陶磁器製品の売り上げは低迷している。こうした状況の中で旧来の生産・流通システムは機能せず、生産者の販売力の弱さという問題が表面化している。常滑焼産地においては、生産者の廃業・規模の縮小が止まらない状況であり、販売状況の改善が大きな課題となっている。そこで各事業所は新製品の開発、海外への出荷、直接販売の導入などの対応を行っている。